

森林農業班 C

平成 15 年度予備調査報告
日常生活に利用される植物に関する民族植物学的研究にむけて
落合雪野（鹿児島大学総合研究博物館）

キーワード：有用植物、生活文化、植物標本、ハーバリウム
 現地調査期間・場所：2003年8月19-29日、ヴィエンチャン近郊

The preliminary report of ethnobotanical studies on useful plants in everyday life in Laos
Yukino OCHIAI (Kagoshima University Museum)

Keywords: useful plants, everyday life, plant specimen, herbarium
 Research Period and Site: August 19-29, 2003, Vientiane and its surroundings

1. はじめに

筆者はラオスで利用されている数多くの有用植物のうち、とくに生活文化に関係の深いものに注目して、平成16年度から現地調査をおこなうことを計画した。日常生活に利用される植物は、住民の居住空間や生業空間に存在するさまざまな生育地、つまり、水田や畑などの耕地、庭畑（キッチンガーデン）、集落内の空地や道路、河川、さらには森林といった場所から得られる。そのなかには、由来の異なる植物群、つまり栽培植物、雑草、野生植物が含まれ、それぞれにたいして人々の認識や関与のあり方が違っている場合が多い。生活文化に関係した植物は、生存にとってかならずしも必要ではない場合や、とくに経済的価値を伴わない場合に利用されることも多い。しかし、当事者の関心や嗜好にもとづいた植物の利用のあり方や、その時間的変化を研究の対象とすることは、「マイナー・サブシステム」[松井1998]、あるいは「在来技術」[吉野2001]の視点から、ラオスの生物資源と人との関係を明らかにするための試みとなると考えられる。

このような研究計画を背景に、平成15年度は、ラオス国立大学林学部とハーバリウムの充実について協議するとともに、ヴィエンチャン近郊の市場で売買される植物をおもな対象に予備的な現地調査を実施した。植物標本は植物の分布や種類を把握するためのもっとも基本的な学術資料であり、この標本を集積するための施設がハーバリウムである。その充実の本調査のみならず、あらゆる植物研究の分野に不可欠である。また市場での現地調査は、利用される植物分類群や方法などについて基礎的な知見を得るとともに、ラオスの他地域と比較をおこなう上で効果的である。以下には、その結果について報告する。

2. ラオス国立大学林学部ハーバリウム充実計画についての協議

8月21日ラオス国立大学林学部にて、林学部副学部長フンペット氏、植物学担当講師カムレック氏ならびに落合がハーバリウム充実のための協議をおこなった。まず林学部内にあるハーバリウム（写真1）を訪問し、現在の使用状況や設備、備品を視察した後（写真2）、今後の方向性について話し合った。なお、この協議には小坂（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）、広田（京都大学大学院農学研究科）の2名の大学院生も参加し、現地で植物標本を作成した経験にもとづいて具体的な提言をおこなった。

その結果、標本を製作するための設備や材料類が不足していること、できあがった標本を収納するためのキャビネットが十分でないこと、植物の同定に必要な図鑑や文献類がそろっていないことが、当面の課題であることがあきらかになった。この結果をもとに、8月27日にはハーバリウム室内を計測し室内配置図を作成したうえで、必要な物品をリストアップした。なお、帰国後は、このリストをもとに物品購入のための手続きを開始した。

3. ヴィエンチャン近郊での現地調査

8月21日から26日かけて、林学部教官のカムレック氏、ブーリー氏、小坂、広田、内田および落合が参加して、

ヴィエンチャン近郊で予備調査をおこなった。おもに市場で売買される植物を対象にしたが、一部庭畑から得られる有用植物や周囲の森林の植物もとりあげた。

まず、できるだけ多くの種類の有用植物を集めるという観点から、市場で聞き取りをしながら、サンプルを購入した。対象となった市場は、Houei Nyang、Thongkhankham、Khuadin、Loom、Ban Lak 52、Sikhay、Taala、Ban Hay、Ban Tha Boc の 9 カ所であり、計 103 点のサンプルを集めることができた。現在同定ができている範囲でサンプルを分類群別にみてもとみると、双子葉植物 31 科（アオイ科、アオギリ科、アカネ科、アブラナ科、イイギリ科、ウリ科、オトギリソウ科、キク科、キョウチクトウ科、コショウ科、ゴマノハグサ科、シソ科、スイレン科、セリ科、ツツラフジ科、ツルムラサキ科、タデ科、トウダイグサ科、ドクダミ科、トケイソウ科、ナス科、ヒシ科、ヒユ科、ヒルガオ科、フウチョウソウ科、ブドウ科、ブナ科、マメ科、ミカン科、ヤマノイモ科）、単子葉植物 8 科（イネ科、オモダカ科、サトイモ科、ショウガ科、タコノキ科、ハナイ科、ヤシ科、ユリ科）およびシダ類となった。用途別では食用（イモ類、葉菜、花菜、果菜、果実、ナッツ、香辛料）、薬用、観賞用などにわけられた。栽培植物だけでなく、多種類の野生植物のさまざまな部位が売買されていたのが特徴的であった。

今回の植物の同定にあたって、参考にした文献のひとつが 241 種類のタイの市場植物が収録されている Jacquat[1990] であった。本調査ではこれと重複するサンプルが何点か見つかっており、タイにおける植物利用との共通性が部分的に認められた。しかしその一方で、食用にされる樹木の芽やつるの性植物、水生植物、あるいは果樹類のなかには、掲載されていないものが多く含まれていた（写真 3）。今後の調査では、このような有用植物について、植物標本と関連情報をセットで収集することにより、植物の利用の実態に関する確実な一次資料を集積していくことが課題となるだろう。

さらに市場の植物に付け加えて、民家、寺院の庭畑から、薬草として利用されるジュズダマ、食用の穀類ハトムギ、貝葉に加工されるタリポットヤシなど 16 点のサンプルを収集した。さらに、周囲の植生について知るため、ナムグムダム湖内の小島でバンレイシ科、ニレ科、フタバガキ科など 33 点を、Houei Nyang 保護林内でサトイモ科、クマツヅラ科、キョウチクトウ科など 32 点をそれぞれ収集した。

以上の現地調査によって得られた 185 点の植物サンプルから、腊葉標本あるいは立体標本を作成した（写真 4）。これは、ラオス国立大学林学部に保管されている。

4. まとめ

林学部との協議により植物標本を学術資料として将来的に有効活用するための基礎を作り、現地調査により市場で売買される植物の種類や利用方法に関するおおよその傾向を知ることができた。平成 16 年度はこの成果を踏まえながら、日常生活に利用される植物について空間的な位置関係を把握した上で、人間の関与がどのように変化してきたかをテーマにラオス北部で現地調査を実施する予定である。

文献

JACQUAT, Christiane 1990 Plants from the Markets of Thailand. Bangkok: D. K. Today Co., Ltd.

松井 健 1998 「マイナー・サブシステムの世界—民俗世界における労働・自然・身体」 篠原徹編『民俗の技術』朝倉書店。

吉野馨子 2001 「在来技術とジェンダー」『国際農林業協力』24:22-30.

Abstract: The pilot study preliminary to a full-scale studies on useful plants in everyday life in Laos was carried out in Vientiane and its surrounding areas from 19 to 29, 2003. Members of Department of Forestry, National University of Laos and the Japanese participants had fruitful discussion toward the enrichment of herbarium facilities. In addition, the field survey on 185 plants from 9 markets and other habitats provides interesting examples of the diversity of useful plants.



写真1 ラオス国立大学林学部ハーバリウムの外観



写真2 ハーバリウム利用状況



写真3 バンレイシ科樹木の果実 (Tha Bok 市場)



写真4 標本の作製